1969.12.11 明治大学

部室を追われて—どこへ行くサークル

学生運動の昂揚と過激化はロック・アウト、学園閉鎖を招来し、恒例の秋の風物史"学園祭"は多くの大学で中止になっている。本学もこの例外でなく、各サークルが年間活動の集約の場として最大行事の一つである「駿台祭」が近来初めて中止された。これは、一応学生側が自発的に中止方を決めたのであるが、サークル間に大きな波紋を投げかけている。

十月九日以来、全学ロックアウトが続く中、全学的に授業は再開されているが、サークル室、学生会館などサークルの活動する場はいまだ厚い板壁に閉されている。

このようにサークルをとりまく情況は厳しく、加えて旧来の文化活動の〈日常性〉へのアンチテーゼが大学闘争の激化とともに現出する中にあって、サークル運動の検証、再建が迫られている。

そこで明大のサークルの活動の状況と問題点を探ってみた。

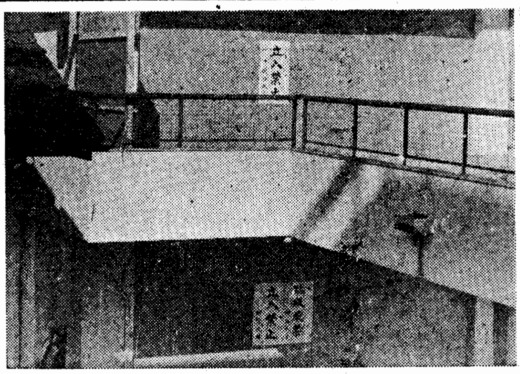
（梶谷記者）

迫られる"質的転換"

—ロックアウト下のサークル/ルポ—

駿台祭も中止で沈下現象

現在、サークル関係の建物でロックアウトを解除されたのは生田部室センター（理科連関係）だけで、駿河台地区新・旧学館、四号館、九号館地下、和泉地区学館、同部室センター、生田学館はロックアウト中である。これに対して各サークルの対応はさまざまであり、そしてその中にあって困惑と苦悩の中に、全体として何ら方向性を見出し得ないのが現状であるといえよう。



カットは"立入り禁止"の貼紙が目立つ和泉の学生会館

また旧来のサークル活動に何んの検証も加えず、単なる延長として細々と"維持"しているに止っており、サークル室が使用できず活動が制限されている現在、それだけサークルは沈下現象を示している。ロックアウトについても、せいぜい"ものとり主義"を叫び声としてあげるのが精一杯のように見える——。

有料施設で活動中

では、「サークル活動を保証する場」であるサークル室を奪われて、その回復についての姿勢はともかく、その活動はどこで行なわれているのだろうか。

文連・研連・理科連など文・理科系サークルは、地区公民館（グリークラブなど）・教会（法律問題研究会など）・民間集会場（観光事業研究会など）などあるが一番多いのは喫茶店で、一応場所は確保しているといえる。しかし、あくまでも仮の場であって、活動は大幅に縮小されしかも直接的なサークル活動以外のコミニュケートは極度に薄れてきている。また会場の使用料もバカにならない。まず一回の活動に平均二〇〇〇円を必要としている。自然に活動日数も週三日から二日、一日へと減っている。「ほんとに金がいる。こんどの演奏会は、経済的にも成功をおさめねば」（A君・グリークラブ）とヘタをすれば、資金難が理由の一つにもなりかねないありさまである。

さらに学外に部屋や練習場を確保しているクラブが多いとはいうものの体育会もその悩みは尽きず「有料施設を借りて活動を続けている部も多く、賃貸料も大変かさみ経済的に破綻しそうな状態にある」（体育会・渡辺健二委員長）という。

一部では奪還を叫ぶ

このように、具体的な障害が表面化し、サークル活動を持続・発展させる意味において深刻な問題としてあるロックアウトであるが、サークルはそれをいかなる活動を媒介にして解除し、サークル活動の場を物理的に確保していくのか具体的な方針を出し得ないでいる。また、そのことはバリケード闘争がサークルの質的変換を触発しなかったことも意味している。もちろん一部には「明大闘争と組み合わせて必ず奪還します」（B君・マスコミ研究会）というように実力で勝ち取るべく闘争を準備しているところもあるが、ほとんど大部分のサークルは何もなそうとしないか、何もなしえないかである。それもどちらかといえば、「ロックアウトは困ります。しかし、演奏会を間近に控えて、それに関わっている暇はありません」（C君・グリークラブ）「今は活動していないから、別に不都合なこともない」（Dさん・オーケストラ）の発言に見られるように、何もなそうとしていない向きがかなりある。

サークル論から出発

一方、「サークルの内部も分解しており、討論をつみ重ねている」（法問研）のように、一定程度積極的な姿勢をしているサークルも数多いが、討論の結果としては、サークル各員の主体性にまかせるところに落ちついている。上級生と下級生、急進と穏健との対立が当然そこに見られるが、いづれも"なれあい"と"まやかしの連帯"で個人レベルからサークル全体への止揚ができないでいる。

結局、個人への還元は「個人の自治」からの出発を目ざしたものではなく、サークル全体が一定方針のサークル論をもって、それに見合う定かな活動を展開し得ていないことを示しているといえよう。サークルの存在基盤とサークル員の連帯がその"確固とした活動"を環としてあるのではなく、実にあやふやな"親睦"と"まとめ主義"にあったことの批判を加えられないところで処理されている。また、そのような処理が「サークル室が使えさえすればいい」という無原則的な対応としてあらわれているようである。

運動は完全に先細り

他方、サークルの『日常性』を否定し、サークル活動を媒介にして全共闘運動を進めてきたサークル連合闘争委員会は、"ものとり主義"ではなく、「旧来サークル」を止揚していく方向で、学館奪還闘争に取りくもうとしていている。バリケードにおいてサ連闘は「大学当局によって一定程度容認を受けたサークルが、その活動の場の保証として当局より与えられたものがサークル室である。そのことはサークル活動そのものが授業と同じように大学共同体の、《秩序》《日常性》を維持する重要な役割を担ってきた」として日常性を否定していく運動を進めてきた。しかし、そのサ連闘も現在はほとんど実態がなく、サ連闘へ結集するサークルはごく特定の少数であり、完全に運動が先細りになったといえよう。

また、サークル全体へこのような外部情況への対応を完全にサークル員一人々々が"主体としての個人"として迫られているのだがサークル員の意識は当然極めて雑多といえる。しかし、その中でも、最大公約数的な対応は、全く"主体としての個人"がどこ吹く風で、その意味では"あなたまかせ"の状態にある。サークルへ入る欲望の一つに、サークル内で、"主体"として生き生きと行動し"主体としての個人"を形成することにあったはずだが、サークル全体の低調とともに、実は"自己完結"に陥いってしまったように思えるところに悲劇が存するといえる。つまり逆にサークルの体質が"自己完結"の"オナニスト"養成所になり下っているともいえよう。

カットは活動の場を失ない、芝生で語らうサークル員—和泉校舎

緊迫した状況こそ

このように、ほとんどのサークルは内面的にも表面的にもじり貧状態を続け、《秩序の枠》に組み込まれた形で活動しているようである。また、長いバリケード闘争が提起した、数々の問題も何らサークルの質的変換をさせなかったともいいかえられる。

サークルはこれまで幾多の変遷をとげて来た。後藤総一郎氏によれば第一期（昭21～31年）は「闘うサークル」、第二期（昭和32～35年）は「休憩室としてのサークル」、第三期（昭和36～39年）は「待合室としてのサークル」、第四期（昭和40年～今日）は「レジャーとしてのサークル」として、今日のサークル論の不毛をあげている。このように、サークル自体も歴史的変遷の途にあり、転換期にあることは事実である。

このように内外ともに極めて厳しい状態にサークルは置かれているが、この緊迫した情況こそ、各サークルにとって質的変換を図るワンステップとして「自己否定の場としてのサークル」という創設期からの原理へと志向するにはまたとないチャンスであることも事実である。